

2026年 4 月 30 日

## 2025 年度 総合文化研究所研究助成報告書

研究の種類 ※該当する（ ）に ○を付ける	・共同研究（ ） ・個人研究（○）	
研究代表者 (所属・職・氏名)	片上絵梨子	
研究課題名	大学運動部活動において学生競技者リーダーに求められる資質の検討	
研究分担者氏名	所属・職	役割分担
研究期間	2025年4月1日 ～ 2026年3月31日	

### 研究実績の概要（1）

#### 1.背景及び目的

大学における学生のスポーツ活動は、目標達成に向けて競技パフォーマンスの卓越性を競う機会であると同時に、そのプロセスにおいて必要な課題を解決する力を養成し、成長する機会でもある。大学スポーツ協会(以下、UNIVAS)は、「スポーツによって磨かれた卓越性を持つ人材の社会への排出」を目標に掲げ、スポーツを通して主体的に考えて行動できる人材育成を目指している。今後の大学スポーツのリーダー育成においては、チームの状況やニーズに合わせて適切かつ効果的にチームを運営に必要な応用的資質（集団や集団構成の特徴を客観的に分析し、課題解決の方法を選択していく力など）チーム運営に必要な応用的な資質を高めるための支援的介入が必要である。本研究では大学スポーツにおけるリーダーに必要な資質として、利用可能なサポート資源を活用する力に焦点を当て、その援助要請スタイルの特徴を明らかにし、援助要請行動との関連が示唆されているストレス対処方略や援助要請スキルとの関連を検討することを目的とした。

なお、当初学生リーダー育成の介入を見据えた研究計画を申請していたが、予定していた分析ソフトを購入出来なかったため、申請時の計画から一部内容を変更して実施することになった。

#### 2.方法

##### 1)調査手続きと対象者

関東および関西にある体育大学、体育・健康スポーツ科学系学部にも所属する大学生スポーツ競技者151名（女性44名、男性107名）を調査対象とした。授業担当者や部活動責任者の許可を得て、授業や部活動前の集会時間に調査協力を依頼し、Google formsを用いたオンライン式質問紙調査を実施した。まず、研究目的や概要、研究への参加は自由意志に基づくこと等、研究参加にあたっての確認

## 研究実績の概要（2）

事項を口頭で説明した上で、参加の同意が得られた者のみに回答を求めた。

### 3)調査内容

①フェイス項目：年齢、学年、性別、競技種目、最高競技レベル（地区大会出場～国際大会入賞レベル）などを尋ねた。

②援助要請スタイル尺度：永井（2013）が作成した援助要請スタイル尺度を使用した。スポーツ競技者における援助要請の行動を尋ねるため、原版の教示文から一部修正を加え、「競技生活において悩みを抱えたときにとる行動」として尋ねた。「困ったことがあったら、割とすぐに相談する」などを含む4項目の過剰型スタイル、「悩みが深刻で、一人で解決できなくても相談はしない」などを含む4項目の回避型スタイル、「相談より先に自分で試行錯誤し、いきづまったら相談する」などを含む4項目の自立型スタイルの3要因12項目で構成された。回答は、各項目について「1:全く当てはまらない」～「7:よく当てはまる」の7件法で尋ねた。

③援助要請スキル：援助要請スキル（本田・新川, 2023）を用いて、「困ったり、悩みを抱え、一人でできないことを周りの人に相談する時に取る行動」について尋ねた。原版の教示文で示された悩み（学業、自分のことなど）と並列して、「競技での悩み」を加筆した。「誰に相談するとよいかを、よく考えてから決める」や「自分をよく見せようとせず、ありのままを相談相手に話す」などの計12項目に対して、「1:全然しない」～「4:いつもそうする」の4件法で回答を求めた。

④コーピング方略：佐々木・山崎(2002)によって作成されたコーピング尺度（GCQ）を用いた。「普段の嫌な出来事、困った出来事に直面した時、どのように行動したり、考えたりしているか」を尋ねた。本尺度は4因子32項目から構成され、「不快に感じていることを態度であらわす」などの感情表出、「誰かにあたたかい言葉をかけてもらおうとする」などの情緒的サポート希求、「悪い事態の中でも希望が持てそうなところに着目する」などの認知的再解釈、「困難な状況を変えるために、最善の方法をとろうとする」などの問題解決を含む項目について、「1:全く行わない」～「4:いつも行う」の4件法で回答を求めた。

### 3. 結果と考察

分析には、IBM SPSS 26を使用した。

#### 1)スポーツ競技者の援助要請スタイルの特徴

援助要請スタイルの下位因子（自立型、過剰型、回避型）における得点可能範囲はそれぞれ4～28点であった。自立型（ $M=20.49\pm 4.05$ 点）、過剰型（ $M=14.89\pm 5.60$ 点）、回避型（ $M=13.93\pm 5.23$ 点）の間に有意な相関は見られなかった。一般大学生を対象とした永井（2013）の研究において、3回の調査を通して得られた援助要請スタイル尺度の各得点平均を見ると、自立型得点は18.01～18.54点、過剰型得点は14.77～15.95点、回避型得点は12.08～13.09点の範囲であったことが報告されている。また、異なる一般大学生を対象とした調査（青柳, 2016）からも、自立型得点は18.23点、過剰型得点は15.82点、回避型得点は12.74点であったことが示されている。本調査で得られた平均値と先行研究から得られた値を比較すると、過剰型得点と回避型得点は同等の値であったが、自立型得点は一般大学生を対象とした先行研究より高い値であった。この特徴がスポーツ競技者に特有の傾向であることを検証するためには今後の調査において比較検討が必要となるが、本調査の対象者の結果より、過剰型得点や回避型得点より自立型得点が高い傾向にあるという示唆が得られた。また、性差を検討した結果、過剰型得点のみ女性より男性の方が高い傾向が示されたものの、それ以外の下位因子得点においては統計的に有意な差は見られなかった。

#### 2) 援助要請スタイルとコーピングの関連

援助要請スタイルとコーピングの関連を検討するため相関分析を行った結果、援助要請スタイル得点とコーピングの下位因子の間でそれぞれ異なる有意な相関が見られた。まず、自立型得点は「認知的再解釈」、「問題解決」との間に有意な正の相関が見られたが、「感情表出」や「情緒的サポート希求」との関連は見られなかった。このことから、援助要請自立型スタイルと、認知的な再解釈を試みることや、問題解決に働きかけるなど、問題焦点型コーピング方略の関連が示唆されたと言える。援助要請自立型は、まず自ら問題対処に取り組み、対処出来ない場合には援助を要請するスタイルであることから、自立型得点が高くなると、問題事象について新たな解釈を試みることや問題解決に向けて直接的に働きかけるなどの問題焦点型のコーピング方略問題対処に向けた取り組みに対して積極的になることが考えられる。

次に、過剰型得点と有意な正の相関が見られたコーピングの下位因子は「感情表出」と「情緒的サポート希求」であり、「認知的再解釈」や「問題解決」との関連は見られなかった。この結果より、過剰型スタイルと情動焦点型のコーピング方略の関連が示唆されたと言える。援助要請過剰型は、自身での問題対処を試みるより先に、周囲への援助を求める援助要請スタイルであることから、過剰型得点の高さは他者へ援助を求めるために必要な自身の感情を表出することや、励ましなどの情緒的なサポートを求めたりする情動焦点型のコーピング方略との関連が示されたと考えられる。認知的再解釈や問題解決といった問題焦点型のコーピング方略との関連が見られなかったことは、他者への援助要請が優先され、自身での問題対処の試みが少ない過剰型スタイルの特徴が示されていることも考えられる。

回避型得点は「感情表出」との間にのみ正の相関が見られ、それ以外の下位因子との関連は示されなかった。援助要請回避型は、対処出来ない問題に直面した場合であっても他者に援助を求めることが難しいスタイルである。回避型得点が高くなる場合、感情表出はするものの、問題に向けて自ら積極的な働きかけをすることや、情緒的なサポートを求めることもしない可能性が推察された。

以上をまとめると、援助要請スタイル得点とコーピングの下位因子には異なる関連が認められ、このことから援助要請スタイルごとに異なるコーピング方略を選択する可能性が示されたと言える。今後の研究においては、上記の特徴を踏まえ、援助要請スタイルごとに学生リーダーとしての資質向上を促進するための介入を検討していく必要がある。

研究発表(印刷中も含む)雑誌および図書  
現在学術誌に投稿準備中.